

『ハムレット』の‘Denmark’s a prison’ passage に関する一考察

辻 照 彦

はじめに

『ハムレット』には、The First Folio (F)にのみ見られ、The Second Quarto (Q2)には見られない、いわゆるF-only passagesが3つある。そのうち2つは2幕2場にあり、台詞の一部を取って、‘Denmark’s a prison’ passageと‘little eyases’ passageと呼ばれている。もう1つは、5幕2場の、オズリックが登場する直前のハムレットとホレイシヨウのやり取りで、‘It will be short. The interim’s mine.’という有名な台詞が含まれているパッセージである。これらのパッセージについては、それがQ2からの削除なのか、それともFへの追加なのかをめぐって研究者の意見が分かれてきた。本論では、‘Denmark’s a prison’ passageについて、削除説と追加説の議論を整理し、テキストの比較分析を通して、削除と追加のどちらの可能性がより高いかを検討していきたい¹⁾。

削除説と追加説を概観してみると、およそ1980年代までは削除説が有力だったことが分かる。John Dover WilsonはすべてのF-only passagesを、Q2からの削除と見なし、それらが後でFに追加されたという考えを否定している²⁾。‘Denmark’s a prison’ passageについては、Q2のテキストにはカットの証拠となるほつれ(frayed edges)が残されているとして、‘but’が繰り返されていることと話題の突然の転換(the sudden turn of the subject)を指摘している。2幕2場の2つのカットは、原稿が印刷所に渡る前に削除されていたとも考えられるが、これらの削除も、もっと短い削除と同様に、植字工が仕事を急ぎすぎたことが原因だという考えに傾いているとも述べている。

W. W. Gregもこのパッセージを削除と見なし、その結果として、‘but’で始まる文章が連続していることを指摘している³⁾。また、削除の理由の説明は見当たらないとも述べている。1幕4場の、デンマーク王室の醜態状態に対するコメントに比べれば礼儀正しいくらいだと述べて、問題のパッセージがジェイムズ1世の妃であったAnne of Denmarkに敬意を表して削除されたという説明に疑問を呈している。

Philip Edwardsは、‘Denmark’s a prison’ passageについて、Fへの加筆より、Q2からの削除の可能性が高いと述べて、印刷所が、デンマークを世界で最悪の牢獄の1つと呼ぶような内容の原稿を活字に組むことに慎重になったのかもしれないと推測している⁴⁾。

Harold Jenkinsは、問題のパッセージはfoul-papersに初めから盛り込まれていたと考えている⁵⁾。さらに、‘The omission of this passage in Q2 leaves as signs of a cut two consecutive sentences beginning with ‘But’, an anomalous capital after a semicolon, and a discontinuity of thought.’と述べて、削除の痕跡として、‘but’で始まる文章の連続、2番目の‘but’のcapitalization、そして、不連続性の3点を指摘している。

以上のような削除説を唱える研究者に対して、G. R. Hibbardは、3つのF-only passagesすべてについて、作者自身による追加(addition)だと主張している⁶⁾。Q2バージョンのままでも十分意味が通じることと、問題のパスセージがFにのみ見られることを考えると、それらのパスセージはFに後で追加されたものと考えるのが自然だというのがHibbardの主張の根底にある。‘Denmark’s a prison’ passageの場合、Q2のままでも意味の理解は可能だが、同時に話の展開が唐突でもあるので、ローゼンクランツとギルデンスターンの evasivenessをより際立たせるためにシェイクスピア自身が後に加筆したとHibbardは主張している。

J. M. Nosworthyは、2幕の2つのF-only passagesは、実は削除ではなく、最後の瞬間の加筆であると主張する十分な根拠がある、と述べている⁷⁾。Nosworthyはその根拠については詳しく説明していないが、彼は後に続く追加説の主張者たちに多大な影響を与えたことは間違いない。

Stanley WellsとGary TaylorもHibbardの主張を支持している⁸⁾。2人は、3箇所F-only passagesすべてについて、削除説は、作者による大規模な改訂の可能性を排除することを目的とした編集上の急場的手段(expedient)にすぎないと主張して、シェイクスピア自身による追加説を支持している。

Jenkinsに対するHibbardの反論

‘Denmark’s a prison’ passageについて、それがQ2からの削除であることを最も強く主張したのはJenkinsだった。先述したように、Jenkinsは削除の疑いようなない痕跡として、‘but’で始まる文章の連続、2番目の‘but’のcapitalization、そして、不連続性という3点を挙げた。Jenkinsの主張に最も詳細に反論を試みたのはHibbardだった。ここでは、Hibbardの反論を少し詳しく検証してみることにする。問題となっているハムレットの台詞をQ2で印刷されていたのと同じスタイルで引用すると次のようになる。Fでは、‘your newes is not true;’と‘But in the beaten way of friendship,’の間に、‘Let me question more in particular’で始まる30行ほどの‘Denmark’s a prison’ passageが続いている。

Then is Doomes day neere, but your newes is not true;
But in the beaten way of friendship, what make you at *Elsonoure*?

まず、連続する‘but’についてHibbardは、それはシェイクスピア作品において少しも珍しいことではなく、Q2版ハムレットにもその例を見つけることができるとして、3つの例を示している。1番目の例は、2幕2場で、ポローニアスがクローディアスとガートルードにハムレットの狂気の原因について説明する次のような台詞である⁹⁾。

Mad call I it, for to define true madness,
What is’t but to be nothing else but mad?
But let that go.

(2.2.93-5)

‘Denmark’s a prison’ passageの連続する‘but’は、ともに等位接続詞の‘but’である。しかし、上の引用文中の1番目と2番目の‘but’はexceptの意味の前置詞であり、3番目の‘but’だけが等位接続詞である。よって、この例は、等位接続詞‘but’の連続が一般的であることの証拠にはならない。

Hibbardが挙げている2番目の例は、5幕2場でフェンシングの試合を前にしたハムレットが、ホレイシオーに不安な胸騒ぎを告白する次のような台詞である。

It is but foolery, but it is such a kind of gaingiving as would
perhaps trouble a woman.

(5.2.188-9)

上の引用文中の1番目の‘but’はonlyの意味の副詞で、2番目の‘but’のみが等位接続詞である。よって、この例も、厳密には、‘Denmark’s a prison’ passageの連続する‘but’に類似した例と見なすことはできない。

Hibbardが示している最後の例は、2幕1場の冒頭で、ポローニアスがレナルドーに、パリで暮らすレアティーズに関する情報をどのように入手すべきかをアドバイスする次のような台詞である。

‘And in part him, but’ – you may say – ‘not well,
But if’t be he I mean, he’s very wild,
Addicted so and so’ – and there put on him
What forgeries you please;

(2.1.17-20)

引用文中の2つの‘but’はともに等位接続詞であり、これらの‘but’は、Hibbardが挙げた例の中では、‘Denmark’s a prison’ passageの連続する‘but’の關係に一番近い。しかし、引用文中の1番目の‘but’は、‘I know his father and his friends, and in part him, but not well,’という具合に、文章の途中に使用されている。他方、‘Denmark’s a prison’ passageの連続する‘but’は、両方とも文頭に位置しているという違いがある。

このように見てくると、連続する‘but’に関しては、Hibbardの反論はあまり有効なものとは言えないだろう。削除説を主張する多くの研究者たちが、連続する‘but’の不自然さを指摘してきたが、それは連続する文章のしかも文頭に、等位接続詞の‘but’が使用されていることから来るものであり、この不自然さは、Hibbardの反論によって払拭されたとはとても言えないだろう。

次に、Jenkinsが削除の痕跡として指摘した、2番目の‘but’が大文字で書き始められているというcapitalizationについて、Hibbardの反論を見てみよう。Jenkinsはそれを変則的(anomalous)と形容したが、Hibbardは特に変則的なところはどこにもないと主張している。さらに、Q2のSignatures F1とF1^vには、コンマの後に位置し同時に行の初めに来ている単語が大文字で書き始められている例が多数見られるので、Compositor Xは韻文を組んでいると考えていたと思われるくらいだと述べて、いくつか例を提示している。

確かに、先に引用した Q2バージョンのハムレットの台詞を見ると、2番目の ‘but’ は大文字で書き始められている。しかし、Hibbardはそれが行頭に位置していることに注目して、1行目は行末にスペースを残した状態で改行されているので、2行目の最初の単語には、韻文を印刷する場合と同じように、機械的にcapitalizationが施された可能性があるとは指摘しているのである。Hibbardが類似例として最初に挙げているのは、2幕2場で狂気を装ったハムレットがポローニアスのことを魚屋と呼んだ直後の次のような台詞である。Q2で印刷されていたのと同じスタイルで引用することにする。

I sir to be honest as this world goes,
Is to be one man pickt out of tenne thousand.
(2.2.176-7)

確かに、この例においても、1行目の行末にかなりスペースを残しながら改行されていて、コンマの後の ‘is’ が韻文中のように大文字で始められている。

この台詞のすぐ後で、ハムレットがポローニアスに娘をあまり外に出さないように忠告する台詞も、Hibbardは類似例として挙げている。その台詞は、Fでは散文として、3行にわたって印刷されている。参考のためにFで印刷されていたのと同じスタイルで引用してみよう。

Ham. Let her not walke i'th Sunne: Conception is a
blessing, but not as your daughter may conceiue. Friend
looke too't.

同じ台詞がQ2では次のように印刷されていた。

Ham. Let her not walke i'th Sunne, conception is a blessing,
But as your daughter may conceaue, friend looke to't.
(2.2.182-3)

この台詞は、コンマの後の ‘but’ がcapitalizeされているので、‘But in the beaten way of friendship’ のケースに非常に近い例となっている。この台詞の場合も、1行目は行末にスペースを残した状態で改行されているので、植字工は、Hibbardが指摘したように、2行目の最初の単語に、韻文を印刷する場合と同じように、機械的にcapitalizationを施した可能性がある。

HibbardはQ2のSignatures F1とF1^Vに限定して、さらに2つの例を挙げている。しかし、その2ページに限定しなければ、Fでは散文として組まれているが、Q2では韻文のように組まれていて、2行目の冒頭の単語にcapitalizationが施されている例は他にもいくつか見つけられる。例えば、‘I will prophecy, he comes to tell me of the players, mark it, / You say right sir, a Monday morning, t'was then indeed.’ (2.2.354-5); ‘Let the doores be shut vpon him, / That he may play the foole no where but in's owne house.’ (3.1.128-9); ‘I

could interpret betweene you and your loue / If I could see the puppets dallying.’ (3.2.223-4); ‘Good my Lord put your discourse into some frame, / And stare not so wildly from my affaire.’ (3.2.279-80)などである。

以上の類似例から推測すると、植字工は、散文の台詞の場合、印刷して3行以上にわたる場合は、行末まで単語を並べる普通の散文形式で組んでいたようだが、2行以内に収まる場合は組み方が一貫していなかったようである。即ち、植字工は普通の散文形式で印刷して、2行目の冒頭の単語には特にcapitalizationを施さない場合もあったが、一方で、あたかも韻文のように各行の行末にスペースを残しながら、2行目の冒頭の単語を大文字で始める場合も決して珍しいことではなかったのである。セミコロンとコンマの違いを無視して考えることができるならば、Jenkinsが変則的としたセミコロンの後に見られる‘but’のcapitalizationは、Hibbardが主張するようにそれほど変則的ではないことが分かる。したがって、‘But in the beaten way of friendship’の‘But’が大文字で始まっていることを、その直前にパッセージが削除されていることを示す証拠と認めることはできないだろう。

最後に、Jenkinsが3番目の削除の痕跡として指摘した不連続性に関するHibbardの反論を検討してみよう。Hibbardは次のように反論している¹⁰⁾。

As for the lack of continuity, Hamlet’s sudden changes of direction are one of the most marked features of the scene. He has, for example, already said to Polonius: ‘For if the sunne breede maggots in a dead dogge, being a good kissing carrion. Have you a daughter?’ (2.2.181-2).

確かに、突然の話題の変化というのは、2幕2場や、ハムレットが狂気を装っている他のシーンの特徴と言えるだろう。しかし、Jenkinsが指摘している不連続性とは、必ずしも、このような話題の急な転換のことだけではないように思われる。Jenkinsは不連続性について次のように説明している¹¹⁾。

Lines 269-70 ask a question in a way that suggests it has been put before – as indeed it has in ll. 239-41, which provide the necessary link between the discussion of Fortune’s treatment of the new arrivals and the reason for their coming.

まず、Jenkinsが不連続性として注目しているのは、‘But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?’という質問が、すでに同じことが質問されたような訊き方になっているのに、その質問がQ2では見当たらないという点である。Jenkinsは、‘Denmark’s a prison’ passage中の、‘What have you, my good friend, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?’という質問がそれに当たると考えている。さらにJenkinsは、Q2で消失しているこの質問が、削除部分の直前の、Fortuneの待遇に関する話から、それに続く、デンマーク訪問の理由に関する話への、つなぎの役割を果たしているということも指摘している。このように、Jenkinsが不連続性として指摘しているのは、単なる話題の突然の変化のことではなく、台詞のやり取りや話

の内容の点でQ2には断絶の痕跡があるということなのである。残念ながら、この問題に関して、JenkinsとHibbardの議論は噛み合っていないと言わざるを得ない。しかし、この不連続性の問題は、‘Denmark’s a prison’ passageが削除されたのか追加されたのかを判断する上で極めて重要な問題なので、Jenkinsの主張をさらに詳しく検討する必要がある。しかし、その前段階として、まず問題のパスセージを含んだFバージョンの流れを詳しく見ておくことにしよう。

Fバージョンの展開

Fでは、ローゼンクランツとギルデンスターンとの再会を喜んだハムレットが、しだいに2人をクロードアスのスパイではないかと疑い始め、やがてそれを確信するという展開が、Q2よりも詳しく描かれている。Fバージョンのシーンを詳しく見ていく際に、同じように、ハムレットが親友ホレイショーと再会する1幕2場のシーンが参考になるので、まずそのシーンを見てみることにしよう。‘O that this too too solid flesh would melt’で始まるハムレットの有名な独白が終わったところに、ホレイショーはマーセラスとバーナードーと共に入場してきて次のように挨拶する。

Hor. Hail to your lordship.

Ham. I am glad to see you well.

Horatio – or I do forget myself.

Hor. The same, my lord, and your poor servant ever.

Ham. Sir, my good friend, I’ll change that name with you.

And what make you from Wittenberg, Horatio?

Marcellus.

Mar. My good lord.

Ham. I am very glad to see you. (*To Barnardo*) Good even sir.

But what in faith make you from Wittenberg.

Hor. A truant disposition, good my lord.

Ham. I would not hear your enemy say so,

Nor shall you do my ear that violence

To make it truster of your own report

Against yourself. I know you are no truant.

But what is your affair in Elsinore?

We’ll teach you to drink deep ere you depart.

Hor. My lord, I came to see your father’s funeral.

Ham. I pray thee do not mock me fellow student,

I think it was to see my mother’s wedding.

Hor. Indeed my lord, it followed hard upon.

(1.2.160-79)

ホレイショーとの再会シーンで参考になるのは、まず、何の用でここにやって来たのかと、何度も理由を尋ねることは特別なことではないということである。ハムレットはここで、'And what make you from Wittenberg, Horatio?'; 'But what in faith make you from Wittenberg.'; 'But what is your affair in Elsinore?' と3回質問を繰り返している。特に何か疑っているわけではなくても、デンマーク訪問の理由を何度も訊くことは普通のことであり、それ自体特別な意味を持っていることではないのである。2点目としては、質問された方は、すぐに真面目に本当の答えを返すのではなく、冗談半分の返事を返してふざけ合うというの、旧友同士が再会した時の会話として、ごく普通のことであるということである。特に学生同士であれば、このような展開は容易に想像できることである。

それでは、ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンと再会する場面を3つの部分に分けて詳しく見ていくことにしよう。最初は、再会を喜んだハムレットが旧友2人に近況を尋ねる部分である。

Guild. My honoured lord!
Ros. My most dear lord!
Ham. My excellent good friends! How dost thou Guildenstern? Ah, Rosencrantz. Good lads, how do you both?
Ros. As the indifferent children of the earth.
Guild. Happy in that we are not over-happy; on Fortune's cap we are not the very button.
Ham. Nor the soles of her shoe?
Ros. Neither, my lord.
Ham. Then you live about her waist, or in the middle of her favours?
Guild. Faith, her privates we.
Ham. In the secret parts of Fortune? Oh most true, she is a strumpet. What news?
Ros. None my lord, but that the world's grown honest.
Ham. Then is doomsday near – but your news is not true. Let me question more in particular. What have you, my good friends, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?
Guild. Prison, my lord?

(2.2.215-33)

学生同士らしい冗談の応酬の後、ハムレットは227行目で 'What news?' と質問している。この質問の意味はあまり正確に理解されているとは言い難い。Alexander Schmidtは *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary* の 'news' の項で、'What news?' や 'What is the news?' という質問は 'What's the matter?' の意味になると説明している。一体どうしたのだという質問は、實際上、何の用でここにやって来たのかという質問と同じなの

で、ハムレットは、すでにここで1度目の‘What make you at Elsinore?’という質問をしていることになる。

ローゼンクランツは、‘What news?’をハムレットの期待した意味とは違う、文字通りの意味にわざと取り違えて、‘None my lord, but that the world’s grown honest.’と返事をする。この台詞を文字通り受け取って、この台詞をきっかけとして、ハムレットが旧友2人を疑い始めると解釈する批評家もいる。例えば Dover Wilson は、ガートルードの息子であり、数分前にポローニアスに向かって、‘to be honest, as this world goes, is to be one man picked out of ten thousand.’と発言したばかりのハムレットにとって、honestな世界というのは途方もない考えであり、さらに王位継承権を奪われたハムレットに対してはあまり機転が利いた発言ではないと述べて、この発言がハムレットの注意を引いて、警戒心を掻き立てたと指摘している¹²⁾。

筆者は、Wilsonの解釈には同意できない。ハムレットが旧友2人を疑い始めるのはもう少し後になってからだと考えからである。ローゼンクランツの‘None my lord, but that the world’s grown honest.’という台詞は冗談であり、この時点では、冗談の応酬がまだ調子よく継続していると考えべきである。実際、George Lyman Kittredgeは‘the world’s grown honest.’をstock jokeと解釈して、伝統的にThomas Kydの作品とされてきた*The First Part of Hieronimo*の1幕3場で、Isabellaが‘What news, Hieronimo?’と質問すると、Hieronimoが‘Strange news: Lorenzo is become an honest man.’と答える場面を例として挙げている¹³⁾。この例を参考にするならば、ハムレットに‘What news?’と訊かれたローゼンクランツは、ここでは、その質問を文字通りの意味に誤解した振りをして、‘None my lord, but that the world’s grown honest.’というstock jokeを返しているのである。それに対して、ハムレットはすぐに‘Then is doomsday near’と別のjokeで切り返している。

ハムレットの‘What have you, my good friends, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?’という質問は、実質上‘What make you at Elsinore?’という質問と同じであるというJenkinsの主張は正しい。しかし、先述したように、ハムレットにとって、これは2度目の質問である。台詞中の‘prison’という単語に様々なハムレットの心理を読み取ろうとする批評家が多いが、デンマークを牢獄にたとえるのは、少なくとも表面上は、旧友同士が冗談を交わしてふざけ合うこのシーンの調子からそれほど逸脱したものとは思えない。何の用でデンマークにやって来たのかと訊く代わりに、どんな悪いことをしてこの牢獄に送られてきたのか、Fortuneにそこまでひどい待遇を受けているとは言っていないのに、と冗談めかして質問しているのである。

ハムレットはホレイショーとの再会の場面で、‘But what is your affair in Elsinore? / We’ll teach you to drink deep ere you depart.’と言っていたが、この後半部分には、何のためにこのような飲んだくればかりの国であるデンマークにやって来たのかという意味が込められている。なぜなら、ハムレットは1幕4場で、デンマークは‘heavy-headed revel’で有名であり、外国から‘drunkards’と呼ばれ‘swinish phrase’で中傷されていると述べているからである。また、2幕2場の後半で役者たちを迎える時にも、ハムレットは、‘Oh, my old friend! why, thy face is valanced since I saw thee last; com’st thou to beard me in Denmark?’と、自分に挑戦するためにデンマークにやって来たのかと冗談

を言っている。牢獄のようなデンマークというのも、このような冗談のバリエーションであり、少なくともハムレットは冗談として理解されることを期待して発言していると考えべきだろう。しかし、ギルデンスターンの‘Prison, my lord?’という返事からも分かるように、この付近から、順調だった冗談の応酬の調子が狂い始める。ハムレットはその継続を期待するかのように次のように続ける。

- Ham. Denmark’s a prison.
Ros. Then is the world one.
Ham. A goodly one, in which there are many confines, wards, and dungeons; Denmark being one o’th’worst.
Ros. We think not so my lord.
Ham. Why then ’tis none to you, for there is nothing either good or bad but thinking makes it so. To me it is a prison.
Ros. Why then your ambition makes it one; ’tis too narrow for your mind.
Ham. O God, I could be bounded in a nutshell, and count myself a king of infinite space, were it not that I have bad dreams.
Guild. Which dreams indeed are ambition, for the very substance of the ambitious is merely the shadow of a dream.
Ham. A dream itself is but a shadow.
Ros. Truly, and I hold ambition of so airy and light a quality that it is but a shadow’s shadow.
Ham. Then are our beggars bodies, and our monarchs and outstretched heroes the beggars’ shadows. Shall we to th’court? for by my fay I cannot reason.
Both We’ll wait upon you.

(2.2.234-53)

ローゼンクランツの‘We think not so my lord.’という台詞からは、シーンの前半に見られた軽快な調子は見られず、ローゼンクランツとギルデンスターンがまじめなモードへと移行してしまったことが読み取れる。ハムレットはモードの変化に気付きながらも、‘Why then ’tis none to you, for there is nothing either good or bad but thinking makes it so. To me it is a prison.’と続けて、軽妙な調子を継続しようと努めているように見える。

しかし、ローゼンクランツとギルデンスターンは、この台詞を文字通り受け取って、ハムレットは、デンマークが牢獄のように思えてならないと告白していると勘違いをする。そして2人は早速ハムレットのメランコリーの原因を探る仕事に取りかかり、図らずも自分たちから尻尾を出してしまうのである。ハムレットの方から罫を仕掛けたと解釈する批評家もいる。Wilsonは先に見たように、世界がhonestになったという発言を契機にハムレットは2人を疑い始め、この部分では、ハムレット自身が旧友2人をambitionの話題に誘っていると考えている。デンマークはprisonだというのは仕掛けられた餌であり、喜んでそれ

に飛びついてしまったギルデンストーンは‘Prison, my lord?’と叫びながら、意味ありげな視線をローゼンクランツと交わすという解釈である¹⁴⁾。

Wilsonの解釈に筆者は同意できない。シェイクスピアが意図した展開は、クローディアスから、機会を見つけてハムレットのメランコリーの理由を探る(to gather as much as from occasion they can glean)ように依頼されたローゼンクランツとギルデンストーンが、いわば功を急ぎすぎて、自分たちの方から尻尾を出して、ハムレットに察知されてしまうというものだったように思われる。ハムレットが旧友2人を疑い始めるきっかけは、ローゼンクランツの‘Why then your ambition makes it one; 'tis too narrow for your mind.’という発言と考えるべきである。いずれにしても、胡桃ほどのスペースでも十分満足できるという有名な台詞の後にハムレットが付け加える‘were it not that I have bad dreams’という言葉は、間違いなく罫であり、この時点ではすでにハムレットは、野心説に沿って自分を探ってくる旧友2人を、恋愛説に沿って探ってくるポローニラス同様、信用ならない人物として警戒し始めているのである。

ハムレットは、決定的な証拠を掴もうとして、ローゼンクランツとギルデンストーンにデンマーク訪問の理由を次のように質問する。

Ham. No such matter. I will not sort you with the rest of my servants; for to speak to you like an honest man, I am most dreadfully attended. But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?

Ros. To visit you my lord, no other occasion.

Ham. Beggar that I am, I am even poor in thanks, but I thank you – and sure, dear friends, my thanks are too dear a halfpenny. Were you not sent for? Is it your own inclining? Is it a free visitation? Come, deal justly with me. Come, come. Nay, speak.

Guild. What should we say my lord?

Ham. Why, anything but to the purpose. You were sent for – and there is a kind of confession in your looks which your modesties have not craft enough to colour. I know the good king and queen have sent for you.

(2.2.254-67)

‘But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?’という質問は、先述したように、実はデンマーク訪問の理由を尋ねる3回目の質問と考えるべきだが、2回目までの単なる挨拶の一部としての質問とは異なり、それを装ったcross-examinationのための質問であることは明白である。この時点で、ハムレットは2人を完全に疑っているものであり、ハムレットに残された仕事はその証拠を掴むことに移っているからである。

ここまで問題のシーンを詳しく見てきたが、Fバージョンでは、ローゼンクランツとギルデンストーンというクローディアスが放ったスパイが、拙い手口で詮索活動を開始してしまい、それによりハムレットにデンマーク訪問の本当の理由を察知されてしまうという

流れでこのシーンが描かれていることが分かる。確かにこのシーンは、ハムレットが旧友と冗談を交わしながら、デンマーク訪問の理由を何度も尋ねるという点では、ホレイショーと再会するシーンと似ている。しかし、その類似性はかえって、ハムレットが再会した2種類の旧友に対して抱くその信頼性の違いを印象づけるものになっている。

Q2の不連続性

Fバージョンの展開を詳しく見たところで、再度、Q2の不連続性という問題について検討してみることにしよう。Jenkinsが不連続性として注目しているのは、‘But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?’ という質問が、すでに同じことが質問されたような訊き方になっているということで、それが、Q2で削除されている、‘What have you, my good friend, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?’ という質問に当たるということであった。確かに、この質問が実質 ‘what make you at Elsinore?’ と同じ意味であるという主張に筆者も賛成する。しかし、この質問の前に、すでに1度ハムレットは同じ意味の質問を旧友たちに発していると筆者は考えるので、すでに同じことが質問されたような訊き方になっているということは、必ずしも不連続性の証拠にはならない。Fバージョンから ‘Denmark’s a prison’ passageを削除すると、そのパッセージの直前直後の展開は次のようになる。

- Ham. In the secret parts of Fortune? Oh most true, she is a strumpet. What news?
- Ros. None my lord, but that the world’s grown honest.
- Ham. Then is doomsday near – but your news is not true. But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?

引用文中の ‘What news?’ を実質上 ‘what make you at Elsinore?’ と同じ意味と解釈すれば、‘But in the beaten way of friendship’ という表現が、すでに同じことが質問されたことを暗示していても問題ないことになる。このように考えると、Jenkinsの不連続性に関する主張は的外れのように見えてくるが、Jenkinsの主張はもう少し複雑である。

Jenkinsは ‘the beaten way’ という表現を率直にという意味に解釈していて、テキストの注釈の中で、‘Hamlet abandons tortuous expressions for plain, frank speech.’ と解説している。すなわちJenkinsは、‘But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?’ という質問は、単に、再度質問することを暗示しているだけでなく、より率直で平易な表現で再度質問することを暗示していると解釈しているのである。デンマーク訪問の理由を回りくどい表現で質問している箇所と言えば、‘What have you, my good friends, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?’ という質問しか考えられない。したがって、‘the beaten way’ が率直で平易な言葉遣いという意味ならば、Q2バージョンでは回りくどい表現の質問が ‘Denmark’s a prison’ passageの一部として消失してしまうので、台詞の連続性が欠如しているというJenkinsの主張は正しいことになる。

しかし、問題は、‘in the beaten way of friendship’ という表現の解釈である。その解釈については必ずしも研究者たちの意見が一致していない。その解釈は大きく3種類に分けられる。まず、Jenkinsのように、‘the beaten way’ を率直な言葉遣いという意味に解釈するグループで、Hibbardもこの解釈を採用している。それに対して、Edwardsは注釈の中で、‘He means he has neglected the ordinary politeness of greeting.’ と述べて、ハムレットは、友人同士の慣習に従って訊かせてもらうが、と言っていると解釈している。Kittredgeも、ハムレットはここで、慣習的な質問をすることを忘れていたことを思い出した振りをして、何気ない挨拶のように見せ掛けて、実際には、旧友2人を尋問するきっかけを導入していると説明している。Kittredgeは、ハムレットがここで初めて旧友2人にデンマーク訪問の理由を訊いていると考えているようだが、筆者はJenkinsと同様、その解釈には賛成できない。

最後に、T. J. B. Spencerは注釈の中で、‘in the beaten way of friendship’ を ‘as the course of our friendship has been well-tried and reliable’ と言い換えて、長い友情のよしみで本当のことを言ってもらいたい、という意味に解釈している。Dover Wilsonも ‘as old friends’ の意味に取っているが、ハムレットの態度はironicalなものと解釈している。十数行後で、ハムレットは、‘But let me conjure you, by the rights of our fellowship, by the consonancy of our youth, by the obligation of our ever-preserved love, and by what more dear a better proposer can charge you withal, be even and direct with me, whether you were sent for or no.’ とさらに執拗に旧友2人に迫っている。SpencerやWilsonは、‘in the beaten way of friendship’ を、ハムレットがいくつも並べている、‘by the rights of our fellowship’ 以下の強調表現のバリエーションと考えているようである。

以上のように、‘in the beaten way of friendship’ の解釈をめぐるでは、必ずしも批評家の意見が一致していない。それどころか、JenkinsやHibbardはハムレットがここで unceremoniousになろうとしていると解釈しているが、EdwardsやKittredgeは逆に、ハムレットはceremoniousになろうとしていると解釈しているのである。

Jenkinsの主張は、‘in the beaten way of friendship’ という表現は婉曲的質問がすでに存在することを前提としていて、その婉曲的質問は、Jenkinsが削除されたと考える ‘Denmark’s a prison’ passageに含まれているのだから、Q2バージョンは ‘Denmark’s a prison’ passageの前後で話の連続性が欠如しているというものであった。この主張が決定的な説得力を持つためには、‘in the beaten way of friendship’ が率直な表現でという意味を持つこと、あるいはその意味でしばしば用いられていることが証明されなければならないだろう。今の時点では、その証明は不十分と言わざるを得ない。

しかし、Fバージョンの流れを詳しく見た時に分かったように、Q2では、ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンを疑い始めるきっかけが欠如してしまっているという重大な不連続性は残ったままである。多くの批評家が、Q2ではハムレットが旧友2人を直感的に疑い始めるため、展開が唐突だと指摘してきた。Wilsonに代表されるように、ハムレットが ‘Denmark’s a prison’ passageの前から2人を疑い始めていると考える批評家にとっては致命的な不連続性とはならないかもしれない¹⁵⁾。しかし、先に見たように、Fバージョンでは、‘Denmark’s a prison’ passageの中で、旧友2人が自ら尻尾を出してしまい、それをきっかけにハムレットは2人を疑い始めるという具合に、ハムレットが疑

念を抱く過程が分かりやすく描かれていた。それに比べると、疑念を抱くきっかけを欠いたまま突然ハムレットが旧友2人を厳しく追及し始めるQ2の展開は、話の流れが途中で断絶してしまっているという印象を読者に与えるだろう。

しかし、この不連続性を追加説の主張者たちは削除の証拠とは考えず、逆に追加の証拠と考える。例えばHibbardは3つのF-only passagesが追加された理由を次のように述べている¹⁶⁾。

The additions have at least one thing in common: they provide more explanation, making it easier for an audience to understand what follows, because Q2’s transitions, though intelligible, are also abrupt. The first of them brings out more fully the evasiveness of Rosencrantz and Guildenstern, which the Prince, fresh from his encounter with Polonius, so quickly detects in Q2.

削除説の主張者たちは、Q2の唐突な展開を削除の証拠と考えるが、追加説の主張者たちは、その唐突な展開こそが、シェイクスピアが‘Denmark’s a prison’ passageを後で加筆した理由なのだと言主張するのである。この主張は、ある意味大変重要なものである。なぜなら、削除説の主張者は、Fバージョンを劇の展開の本来の姿と暗黙の内に見なしてしまい、それとの比較でQ2の展開の唐突さを指摘する可能性があるからである。

Q2の不連続性という重要な問題を検討するためには、単に、Fバージョンと比較した時の話の展開の唐突さだけではなく、さらに、‘Denmark’s a prison’ passageがそれ以外の部分から強引に切り離されたことを示す痕跡、言い換えるならば、削除される前の連続性を伺わせる証拠をより詳しく調べる必要があるとってくる。

断絶の痕跡

‘Denmark’s a prison’ passageとそれ以外の部分との間に緊密な連続性を伺わせる証拠があれば、それは問題のパッセージが削除されたことの有力な証拠となる。連続性を示す具体的な証拠としては、トピックの連続性といった目立ちやすいものから、同義語や対義語のような単語間の響き合いといった微妙なレベルのものまで考えられる。ここでは、‘Denmark’s a prison’ passageについて、パッセージ前後の部分との間に連続性を伺わせるどのような痕跡があるかをまとめてみることにする。

連続性を調べる際に、最初に焦点を当てるべき場所は、問題のパッセージがそれ以外の部分と接する境界線付近だろう。まず、前の境界線付近のやり取りをもう一度見てみよう。引用中、ハムレットの‘Let me question more in particular.’という言葉から問題となる‘Denmark’s a prison’ passageが始まるのでそこに角括弧をつけることにする。

Ham. In the secret parts of Fortune? Oh most true, she is a strumpet. What news?

Ros. None my lord, but that the world’s grown honest.

Ham. Then is doomsday near – but your news is not true. [Let me question more in particular. What have you, my good friends, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?

(2.2.226-32)

Jenkinsは、Q2で削除されている ‘What have you, my good friend, deserved at the hands of Fortune, that she sends you to prison hither?’ という質問が、削除部分の直前に見られるFortuneの待遇に関する話から、その後の、デンマーク訪問の理由に関する話へのつなぎの役割を果たしていると指摘していた。確かに、Fortuneが、‘Denmark’s a prison’ passageの中にも出てくることは、問題のパッセージとその前の部分との連続性を示す重要な痕跡である。

Fortuneのトピックほど顕著ではないが、‘Let me question more in particular.’ という台詞は、ローゼンクランツの ‘the world’s grown honest.’ という台詞と響き合っていると思われる。‘more in particular’ という表現は、もっと詳しくという意味に一般には解釈されている。しかし、その後の質問はそれほど詳しい質問になっていない。むしろここでは、一般的(in general)な話ではなく、1人1人について、より個別にという意味だと思われる。OEDは ‘in particular’ の定義として ‘in detail’ という意味も提示しているが、同時に、‘one by one’ や ‘individually’ の意味も提示している。ここでは後者の意味により近いのではないだろうか。ローゼンクランツが ‘the world’s grown honest.’ という一般的な答えをしたので、ハムレットはそれを受けて、もっと個別な質問をさせてほしいと言っているのである。

前の境界線付近で特に目に付くのは以上の2点だが、‘Denmark’s a prison’ passage中の ‘the hands of Fortune’ という表現も、連続性を伺わせる痕跡の1つと考えられるかもしれない。‘at the hands of’ は、もちろん表面的には、ある行為者によってという意味の慣用表現である。しかし、‘Denmark’s a prison’ passageの直前に見られる、旧友2人に対するFortuneの待遇に関する話の所では、‘Fortune’s cap’; ‘the soles of her shoe’; ‘Her waist’; ‘her privates’; ‘the secret parts of Fortune’ といった具合に、Fortuneの身体の一部への直接的、あるいは間接的な言及が続いていた。‘the hands of Fortune’ という表現もその一環と考えることもできるだろう。

次に、後ろの境界線付近のやり取りを見てみよう。ハムレットの ‘I am most dreadfully attended.’ という言葉で ‘Denmark’s a prison’ passage が終わるので、そこに角括弧をつけることにする。

Ham. Then are our beggars bodies, and our monarchs and out-stretched heroes the beggars’ shadows. Shall we to th’court? for by my fay I cannot reason.

Both We’ll wait upon you.

- Ham. No such matter. I will not sort you with the rest of my servants; for to speak to you like an honest man, I am most dreadfully attended.] But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?
- Ros. To visit you my lord, no other occasion.
- Ham. Beggar that I am, I am even poor in thanks, but I thank you – and sure, dear friends, my thanks are too dear a halfpenny.
- (2.2.250-60)

‘Beggar’に関するトピックの連続性については、Dover WilsonやEdwardsも指摘している。ハムレットは引用した最後の台詞の中で‘Beggar that I am,’と言っているが、これは、‘Denmark’s a prison’ passageの中の‘Then are our beggars bodies, and our monarchs and outstretched heroes the beggars’ shadows.’という台詞を受けたものである。確かに、この台詞中の‘beggars’への言及がない状態で、ハムレットの‘Beggar that I am,’という表現が出てくると、ハムレットがなぜ突然自分のことを‘Beggar’と呼ぶのか少し理解に苦しむ。しかし、‘Denmark’s a prison’ passageの中の‘beggars’に関するやり取りを受けたものと考えれば、ハムレットはここで、単に経済的な困窮を意味しているのではなく、自分が、‘monarchs’や‘outstretched heroes’とは違い、‘beggars’同様、まったく野心を持たない人間であることをほのめかしていることが分かるのである。

後ろの境界線付近で注目すべきもう1つの連続性の痕跡は、ハムレットの‘I will not sort you with the rest of my servants’ という台詞中の‘servants’と、‘But in the beaten way of friendship’ という台詞中の‘friendship’との照応関係である。ハムレットは、友人から主従関係を表明されると、それを否定し、友情関係を強調する傾向がある。例えば、先に見たホレイショーとの再会の場面で、ホレイショーが‘your poor servant ever.’と挨拶すると、ハムレットは、‘Sir, my good friend, I’ll change that name with you.’と返事をしている。この‘that name’は‘good friend’を指していると解釈すべきで、ハムレットは、ホレイショーとの関係を対等な友人関係と考えていることを強調しているのである。また、1幕2場の最後のところで、ホレイショー、マーセラス、そしてバーナードーが‘Our duty to your honour.’と別れの挨拶をする時も、ハムレットは‘Your loves, as mine to you. Farewell.’と応じて、ここでも、主従関係より友情を強調している。

ハムレットとローゼンクランツとギルデンスターンとのやり取りは、ホレイショーとのやり取りよりも複雑である。ハムレットが、‘ambition’の議論に疲れて、頭が働かないから宮殿の中に入ろうと言うと、旧友2人は‘We’ll wait upon you.’と返事をする。2人は、お供します、という意味で言っているのだが、ハムレットはそれを、僕として仕えるという意味に取る。そしてハムレットは、‘No such matter. I will not sort you with the rest of my servants;’と告げて、表面上はホレイショーと再会した時のように、主従関係を否定する。さらにハムレットは、僕としてではなく、友人として質問するのだが、と友人関係を強調しながら厳しい追及を開始するのである。このように考えると、‘But

in the beaten way of friendship’ の ‘friendship’ は、‘I will not sort you with the rest of my servants’ の ‘servants’、さらには旧友2人の ‘We’ll wait upon you.’ という台詞と響き合っていることが分かるだろう。

以上、‘Denmark’s a prison’ passageの境界線付近の連続性を順に見てきたが、最後に、もう少し離れた場所にある表現間の関連性を1点指摘しておきたい。問題のパッセージの最後の所の ‘for to speak to you like an honest man,’ という表現は、前の境界線の直前にある、‘the world’s grown honest.’ というローゼンクランツの返事と響き合っている。さらに ‘an honest man’ という表現は、直前のいわゆるFishmonger sceneに出てきた、‘Then I would you were so honest a man.’ (2.2.174)や ‘Ay sir. To be honest, as this world goes, is to be one man picked out of ten thousand.’ (2.2.176-7)というハムレットの台詞と響き合っているように思われる。

むすび

Jenkinsは ‘Denmark’s a prison’ passageがQ2原稿から削除された痕跡として、‘but’ で始まる文章の連続、2番目の ‘but’ のcapitalization、不連続性、以上3点を指摘していた。このうち ‘but’ のcapitalizationについては、Hibbardの反論どおり特に変則的な点は認められないことが分かった。また、‘But in the beaten way of friendship, what make you at Elsinore?’ という質問が、すでに同じことが、より婉曲的な表現で質問されていることを暗示しているという主張は、‘the beaten way’ という表現がplain speechの意味であることを前提としているが、そのような解釈は必ずしも十分に確立されたものではないことも分かった。他方、‘but’ で始まる文章の連続と、Fortuneのトピックの連続性については、今も削除説の有力な証拠と見なすことができる。

本論では、削除説の裏付けとなりうる、‘Denmark’s a prison’ passageとそれ以外の部分との連続性を伺わせる痕跡をより詳しく分析した。目立ちやすいトピックの連続性としては、前の境界線を挟んで継続しているFortuneのトピックと、後ろの境界線を挟んで継続しているBeggarsのトピックを指摘した。さらに、より細かい表現上の照応関係としては、ハムレットの ‘Let me question more in particular.’ という台詞中の ‘more in particular.’ という表現と、ローゼンクランツの ‘the world’s grown honest.’ という一般的な内容のコメントが響き合っていること、ハムレットの ‘I will not sort you with the rest of my servants’ という台詞中の ‘servants’ という単語と、直後の ‘But in the beaten way of friendship’ という台詞中の ‘friendship’ が響き合っていることを確認した。さらに、‘Denmark’s a prison’ passageの最後の所にある ‘for to speak to you like an honest man,’ というハムレットの台詞は、前の境界線の直前にある、‘the world’s grown honest.’ というローゼンクランツの台詞と響き合っていた。

本論では、Fバージョンの展開も詳細に分析したが、その結果、ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンを疑い始めるきっかけがQ2では欠如してしまっているという深刻な不連続性の問題が浮かび上がってきた。筆者の解釈によれば、ハムレットは ‘Denmark’s a prison’ passage以前には旧友2人をまだ疑っていない。問題のパッセージの中で、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットのメランコリーの原因を野心

と思ひ込み、すぐに露骨な追求を始めて自ら尻尾を出してしまったために、ハムレットは旧友2人を疑い始めるのである。疑念を抱ききっかけを欠いたまま突然ハムレットが旧友2人を厳しく追及し始めるQ2バージョンには、話の流れに明白な不連続性が存在するように思われる。

しかし、Hibbardをはじめとする追加説の主張者たちは、Q2の唐突な展開を削除の証拠とは考えず、逆に、その唐突さを解消するためにシェイクスピアは‘Denmark’s a prison’ passage を後で挿入したのだと主張する。この主張の妥当性を判断するためには、挿入の実現可能性を考慮する必要があるだろう。ハムレットが旧友2人と再会するシーンに新たなパッセージを後で挿入したと仮定した場合、直前のFortuneの話題を継続して台詞を発展させることは比較的容易なことかもしれない。それに比べて、パッセージの直後に出てくる‘Beggar’という単語に注目して、パッセージの後半にその話題を盛り込むことは決して容易なことではないように思われる。さらに、前後の境界線を挟んで、先に見たような、単語やフレーズレベルの微妙な照応関係を成立させることは、さらに困難だろう。

全般的な傾向として、Q2ではFよりも、前シーンの筋に比較的忠実に描かれているという特徴も考慮に入れる必要があるかもしれない。ローゼンクランツとギルデンスターンは、2幕2場冒頭でクローディアスとガートルードに歓迎された時、ハムレットを苦しめている原因について、できる限り情報を集めてほしいと懇願される。ローゼンクランツとギルデンスターンはその依頼を受けて、早速‘Denmark’s a prison’ passageで情報収集に取りかかっていると考えるのが自然ではないだろうか¹⁷⁾。

本論で詳しく分析した結果、連続する‘but’が台詞の断絶の痕跡と認められることと、‘Denmark’s a prison’ passageとその前後の部分との一体性を示す痕跡として、トピックのレベルから単語やフレーズといった微妙なレベルまでの照応関係が見られることが明らかになった。このような一体性が成立するように後で新たなパッセージを挿入することの困難さと、Q2では、後のシーンが前のシーンの筋に比較的忠実に描かれているという全般的傾向を考慮に入れると、‘Denmark’s a prison’ passageはQ2の印刷原稿であるfoul papersに最初から盛り込まれていて、それが、後に何らかの理由で削除されたと考える方がより合理的なのではないだろうか。

注

- 1) ‘little eyases’ passageについて筆者は、それをQ2からの削除と見なす考えを支持している。「『ハムレット』のthe ‘little eyases’ passageに関する一考察」、『新潟大学経済論集』第88号(2010年3月)。
- 2) John Dover Wilson, *The Manuscript of Shakespeare’s ‘Hamlet’ and the Problems of Its Transmission*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1934; reprint, 1963), 96-9.
- 3) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History* (Oxford:

- Clarendon Press, 1955), 312.
- 4) Philip Edwards, ed., *Hamlet*, The New Cambridge Shakespeare(Cambridge: Cambridge University Press, 1985), 2幕2場、229-256行目に関する注釈。
 - 5) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), 44-5, 467.
 - 6) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford University Press, 1987), 110-2.
 - 7) J. M. Nosworthy, *Shakespeare's Occasional Plays: Their Origin and Transmission* (New York: Barnes and Noble, 1965), 139.
 - 8) Stanley Wells and Gary Taylor, with John Jowett and William Montgomery, *William Shakespeare: A Textual Companion*(Oxford: Oxford University Press, 1987), 399.
 - 9) *Hamlet*からの引用とact-scene-line numberingは原則、Philip Edwards編集The New Cambridge Shakespeare版による。
 - 10) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, 111.
 - 11) Jenkins, ed., *Hamlet*, 467.
 - 12) John Dover Wilson, *What Happens in 'Hamlet'*, 3d ed.(Cambridge: Cambridge University Press, 1951; reprint, 1954), 118-9.
 - 13) George Lyman Kittredge, ed., *Hamlet* (Boston: Ginn and Company, 1939), 2幕2場、241行目の 'the world's grown honest.' に関する注釈。
 - 14) Dover Wilson, *What Happens in 'Hamlet'*, 121-2.
 - 15) Edward Dowdenはハムレットの 'In the secret parts of Fortune?' という台詞の注釈の中で、ハムレットは旧友2人をこのあたりから疑い始めているのだろうかと自問している。Edward Dowden, ed., *Hamlet* (Indianapolis: Bowen-Merrill, 1899).
 - 16) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, 111-2.
 - 17) 同じように、クローディアスは4幕7場でレアティーズにフェンシング試合でハムレットを殺害する計略を説明する際に、誰かにハムレットの対抗心を刺激させることを提案する。それを受けてQ2では、5幕2場でオズリックが、ハムレットの前で不器用ながらも長々とレアティーズを賞賛しようと努める。しかし、よく知られているように、Fでは、オズリックがレアティーズを賞賛する二十数行にわたるパッセージは削除されている。